

資料紹介 中本たか子の書簡

矢 本 浩 司

一

角島出身の作家中本たか子は、大正末頃から平成の初めまで息長く執筆したが、彼女の書簡については、あまり確認されていない。

今回紹介するのは、中本たか子が川辺勝代氏に宛てた一九八〇年五月一五日消印の書簡と一九八六年八月九日消印の書簡の二通である。便宜上前者を書簡①、後者を書簡②と呼ぶ。二通の書簡の原本は中本たか子文学資料館^②に寄贈するために川辺氏が知人に託したが、中本たか子文学資料館にはわたっておらず、その後は行方不明となった。現在、川辺氏の手元には二通の書簡の複写が残っている。

以下に書簡①及び②の翻刻を掲げ、解説を付す。その後、これまで確認されている中本たか子の書簡について言及する。

書簡①

封筒表面

751

下関市大学町

(以下略)

川辺勝代様

封筒裏面

緘

177

東京都練馬区

下石神井四 (以下略)

中本たか子

五月十五日

本文

川辺勝代様

お手紙いただき、誠にありがとうございます。又、新聞の切抜きもありがとうございました。

拝見してみました。祖母の妹云々——とありましたが、祖母にそんな妹がいたかどうかもわかりませんが、話があまりに遠い過去のこと、何とも仕方ありません。

私が角島をでたのが、小学校卒業の年ですから、以来環境もかわり、交友かんけいも変り、人生の志向もまるでちがった方向をたどり、角島の親戚、縁者は、五十年、六十年の昔のことになりますし、そちらの人がわかる人も身辺にいません。

さて、話はかわりますが、あなたの職場の方、なかなか大変でしょう。むつかしい時代になりました。私などの出版界の仕事もむつかしいことになりました。

本が売れない、企画をさしひかえるというようになり、ジリ貧になってゆきます。このところを通り抜け

ないと、光彩の世界にでられません。

まあまあいろいろとし、今のところ、作がばっとしません。お互いに、自分の持ち場を努力して維持しましょう。とりあえずお返事まで。

五月十五日

中本たか子

書簡①について

長形4号封筒の表面に宛先の住所氏名が記載されているが、郵便番号の下二桁の記載がなく、郵便局による「郵便番号はハッキリと」の押印がある。消印は一九八〇年五月一日である。裏面には手書きで「緘」とあり、中本たか子の住所氏名と「五月十五日」の記載がある。郵便番号の下二桁の記載がない。本文は便箋に縦書き三枚である。改行は書簡の改行に合わせている。

川辺勝代氏は、角島出身の書道家道岡香雲の弟子である。川辺氏によれば、師の香雲が「作家の中本たか子が祖母の妹の子」であると語ったという新聞記事が川辺氏の目にとまり、川辺氏はその切り抜きを同封した書簡を中本たか子に送ったことである。³⁾ 書簡①は、これに対する中本たか子の返書である。川辺氏が切り抜いた新聞記事は詳らかでないが、富田義弘「書道有情」に道岡香雲が「作家の中本たか子が祖母の妹の子」であると語ったとある⁴⁾。書簡にある「祖母の妹云々」は、「作家の中本たか子が祖母

の妹の子」という香雲の記事への中本たか子の反応である。「私が角島をでたのが、小学校卒業の年」とあるが、中本たか子は一九一六年三月に角島小学校を卒業し、山口県立山口高等学校（現山口県立山口中央高等学校）に入学している。一学期は寄宿舎で生活した。二学期からは、一家が山口町（現山口市）大字後河原栗本小路一九八へ転居してきたので、自宅から通学した。「あなたの職場の方、なかなか大変でしょう」とあるのは、川辺氏の職場の労働環境を指している。川辺氏が自身の身辺事情を書簡に綴ったことを受けたものである。「むつかしい時代になりました」。私などの、出版界の仕事もむつかしいことになりました」とあるが、いわゆる出版不況は一九九〇年代の末頃から起こり、八〇年当時の出版界はまだまだ好調であったので、「本が売れない、企画をさしひかえる」、「ジリ貧」などの表現は中本たか子個人の状態を言っているものと思われる。それまでは旺盛に執筆していた中本たか子だが、一九七〇年以降毎年雑誌に一、二本のエッセイを載せる程度となり、七九年から八三年の四年間は作品の発表がほとんどない。書簡①では「このところを通り抜けないと、光彩の世界にでられません」と言いつつも、しかし「今のところ、作がぱっとしません」という苦難を吐露している。「自分の持ち場を努力して維持しましょう」と前向きな気持ちで締められるが、書簡①は、この時期の作家としての中本たか子の思いをうかがうことができる現在のところ唯一の資料として、貴重である。

る。なお、中本たか子は一九四一年五月に蔵原惟人と結婚して東京都練馬区下石神井に転居し、晩年まで住んだ。⁵⁾

書簡②

封筒表面

751

下関市大字町（以下略）

川辺勝代様

封筒裏面

緘

177

東京、練馬区

下石神井四（以下略）

中本たか子

八月九日

本文

川辺勝代様

その後ごぶさたしています。いかが、お過しでございませうか。さて、お忙しいところに、とつぜんこんなことを申しまして、恐縮でございますが、実は左

記のところ書きがわかりませんので、お報せいただきますと、幸甚に存じます。

一、梅光女学院大学文学部

(下関市吉見妙寺町三六五)

二、下関市立図書館

(下関市 町)

道岡光雲氏はお元気でございますか。

今度おあいになりましたなら、よろしくお伝え下さいませ。

では、甚だ勝手ながらよろしくお願

い申し上げます。

八月九日

中本たか子

新聞記事への書き込み

写真、前列、左から三人目―中本

書簡②について

封筒表面には宛先の住所氏名が記載されているが、郵便番号の下二桁の記載はない。消印は八六年八月九日である。裏面には手書きで「緘」とあり、中本たか子の住所氏名と「八月九日」の記載がある。郵便番号の下二桁の記載がない。本文は便箋に縦書き二枚である。一九八一年七月二十九日付『毎日新聞』の記事「総合雑誌 女人芸術 復刻出版記念会」(一一頁上段)の切り抜きが同封されていて、切り抜きの左下に中本たか子による直筆の書き込みがある。記事下には『女人芸術』を復刻出版した龍溪書舎の住所と電話番号と郵便振替番号(全て当時の情報)が明記されている。改行は書簡の改行に合わせている。

中本たか子が川辺氏に宛てた書簡で、梅光女学院大学文学部(現梅光学院大学文学部)梅ヶ峠キャンパスの郵便番号と、下関市立図書館の町名と番地と郵便番号を問い合わせる内容である。また、この書簡が届いてすぐに、梅光女学院大学と下関市立図書館に著書を送りたいから所書きを知りたいとの電話が中本たか子から川辺氏にあったことを川辺氏本人に確認している。著書とは、おそらく直前の一九八六年七月に白石書店から上梓した『広島島へ：そしてヒロシマへ』(「私の戦後平和運動史」として回想した記録)であろうと思われる。書簡②には、川辺氏による梅光女学院大学の郵便番号、短期大学(現梅光学院大学)の住所、当時

の下関市立図書館（現下関市役所上田中町庁舎）の郵便番号と住所等の書き込みがある。書簡②で中本たか子は「道岡光雲氏はお元気でございますか」（光雲は香雲の間違い）と道岡香雲の消息を尋ねているが、道岡香雲は一九八四年に梅光女学院大学の助教（書道課程を担当）に就任し、八九年に教授となり、九一年には主任教授となった。中本たか子が梅光女学院大学文学部に道岡香雲が所属していることをどこかで知って「梅光女学院大学文学部」宛に献本を考えた可能性もあるが、一九二一年一月から一九二五年五月まで下関市王江小学校（下関市入江町）で約三年半の間、訓導として勤務したことがあり、小説「新聞紙が作った海峡」（一九二九年一月『創作月刊』）では関門を舞台とした中本たか子が、故郷山口県下の自身もゆかりがある下関市の文学の拠点として梅光女学院大学と下関市立図書館を見定めて、著書の寄贈を思い立った可能性が考えられる。中本たか子は書簡②に記した日付（及び消印の日付）の前日まで広島にいて、原水爆禁止世界大会に参加していた。東京に戻った直後に書簡②をしたためたのは、原水爆禁止世界大会参加の情熱冷めやらぬなかで、平和運動の記録である自著『広島へ：そしてヒロシマへ』の寄贈に駆り立てられたからではないか。川辺氏に書簡②を送った直後に電話もして尋ねているので、一刻も早く著書を届けたい性急な思いに突き動かされたのかもしれない。

同封の新聞記事は、長谷川時雨主催の一九二八年七月から

一九三二年六月まで四八冊を発行した総合（文芸）雑誌『女人芸術』の龍溪書舎による復刻出版記念会の模様取材した写真入の記事である。『女人芸術』に参加した作家佐多稲子や松田解子、中本たか子らが集まった。復刻元の龍溪書舎の郵便為替番号等の情報入りで一九八一年の新聞記事を同封したのは、中本たか子が『女人芸術』の復刻版を購入してもらうことを望んだためであろう。記事の「写真、前列、左から三人目」は、中本たか子本人で間違いない。なお、『女人芸術』の参加者が終刊以来一堂に会した最初は、一九八〇年一月である。一九八〇年一月一日の『読売新聞』に、「女人芸術」50年ぶり同窓会 女性の地位向上のパイオニア」と題する記事がその旨を報じている。

二

現在までに確認されている中本たか子の書簡は少ない。存在が確認できる書簡は、一九三一年二月号の『女人芸術』に掲載された獄中からの手紙、一九三八年四月日付の徳富蘇峰宛の書簡、一九七四年一月に山口県立豊北高等学校の高校生に宛てた書簡、詩人で郷土文学研究家の和田健に宛てた書簡「静と動のふるさと」などに限られている。また、文人から中本たか子に宛てられた書簡で確認されているものは、一九二六年一月二十四日付の横光利一からの書簡などに限られている。これらの書簡の経緯を解説したものがこれまでにあまり見当たらないので、ここに記し

ておく。

獄中からの手紙

獄中からの手紙は、中本たか子が市ヶ谷刑務所に収監中に、彼女が参加していた『女人芸術』主宰の長谷川時雨に宛てた二通の手紙で、一九三二年二月号の『女人芸術』の「読者通信欄」に掲載されている。手紙の著者の欄は「中××か子」と伏せ字になっている。中本たか子は、一九三〇年七月一日に治安維持法違反の容疑で逮捕され、一〇月二六日に起訴されて市ヶ谷刑務所に移送された。勾留中の七月下旬に受けた特高からの凄惨な拷問、八月中旬の中絶、翌三一年一月七日頃に読んだ郷里の父からの激越な手紙などによって精神に異常をきたして、同年二月五日から東京府松澤病院に入院する。長谷川時雨が度々市ヶ谷刑務所に出向いて中本たか子に布団などを差し入れており、手紙にはこのことへの感謝や郷里の父に申し訳ないという思いや服役中の向学心や監獄生活の様子などが述べられている。一二月一四日付の時雨からの手紙を一二月二一日に受け取ったと書いてあり、新年の挨拶などは書かれていない。年明け早々に精神を患うので、おそらく一二月下旬までに執筆して送ったものと思われる。尾形明子『女人芸術の世界』^⑩に全文の引用がある。

徳富蘇峰宛書簡

徳富蘇峰宛の書簡（一九三八年四月四日付）は、徳富蘇峰記念館が所蔵している。蘇峰に自著『南部鉄瓶工』（一九三八年二月『新潮』掲載、四月に新潮社から単行本化）の評価を求め、出版の力添えを要請する内容の書簡である。中本たか子「閑話とりどり」（一九三八年五月『国民思想』）に「徳富蘇峰先生に拙著を差上げたところ、又私の手紙と行き違ひに礼状を頂いた」とある。「又」とあるのは、美濃部達吉に対しても『南部鉄瓶工』を献本し、礼状が届く前に先走って「挨拶の手紙」を送ったことを指す^⑪。

山口県立豊北高等学校高校生宛書簡

山口県立豊北高等学校の高校生に宛てた書簡（一九七四年一月）には、同年の山口県立豊北高等学校（現山口県立下関北高等学校）の文化祭で文芸部が「郷土出身女流作家 中本たか子」展を開催することに合わせて中本たか子が宛てたものである。故郷の高校生の未来を応援する内容で、「豊北高校の皆さんへ」と題して、一九七五年二月発行の山口県立豊北高等学校文芸部の同人誌『葦芽』二八号に掲載された^⑫。同号には「郷土出身女流作家 中本たか子先生との対談記」も掲載されているが、これは、修学旅行で東京に来た豊北高校二年生文芸部員三名と中本たか子が駿河台ホテルで面会したときの口述のまとめである。豊北高校の文芸部が中本たか子とどうして接点を持ったのか定かではないが、

『葦芽』には中本たか子と親交があった郷土の文人和田健も寄稿しているので、おそらく和田健を仲介したのではないか。なお、中本たか子は翌年の『葦芽』二九号に文芸部の依頼に応じて、『児玉花外 人とその作品』と題する文章を寄稿している。

和田健宛書簡「静と動のふるさと」

和田健に宛てた書簡「静と動のふるさと」は、和田健「中本たか子」（二〇〇六年三月、文学回廊構想推進協議会編『やまぐちの文学者たち』）に、その翻刻（一部）と写真（書簡の一頁目）が掲載されている。書簡の日付等は不明だが、故郷（山口市）の山々を評する内容で、「年をとってくると」、「いま、年とって」などの表現から中本たか子が後年に書いたものである。一九三九年三月下旬に妹の縁談などのために郷里に戻った中本たか子は、帰省三日目（最終日）に「会いたかった詩人」の職場を訪れたことを「乳母車」¹³に書いている。これより以前に自身の詩集を中本たか子に贈っていた和田健が、「昭和十四年であった」として、中本たか子の来訪を受けたことを回想している¹⁴ので、中本たか子が「乳母車」に記す「会いたかった詩人」は和田健のことであると考えられる。以来、両者には親交が続き、和田健が上京の相談を中本たか子にするなどしている。なお、和田健は二〇一三年に九八歳で亡くなっている。

資料紹介 中本たか子の書簡

中本たか子宛横光利一書簡

横光利一が中本たか子に宛てた書簡（一九二六年一月二四日付）は、横光が中本たか子に上京を促す内容であり、これより以前に中本たか子が自作を横光に送っていたことが知れる。菊池寛や片岡鉄兵の名も記されていて、興味深い。この書簡は二〇〇六年五月に加藤慎行氏が「中本たか子宛横光利一書簡について」で紹介し、さらにその翌年に、「中本たか子宛横光利一書簡について——一九二六年秋、作家希望の若き教師に送った手紙」¹⁵で翻刻と考証を行い、書簡の写真を掲載した。経緯については、加藤氏が、二〇〇六年一月一三日に中本たか子の妹鳥潟美喜子氏¹⁶から山口県立大学附属郷土文学資料センターに寄贈されたもので、河出書房新社の『定本横光利一全集』未収録書簡であることを確認している。この書簡の内容については、加藤氏の考証があるのでここでは触れない。ただ、加藤氏は書簡の寄贈にあたっては和田健に「御尽力を頂いた」とだけ記しているが、この横光の書簡の存在については、その和田健が、一九九一年一月号の『広報ほろこく』¹⁷に発表した「孤高の女流作家 中本たか子さんをしのぶ」と題するエッセイの中で既に紹介しており、書簡（大部分）の写真もここに載っている。このことを最後に付言しておく。

注

- 1 これまでに確認されている書簡については後述する。

- 2 二〇〇一年一〇月角島に開館し、二〇一二年一月に閉館した。所蔵の資料は閉館に伴って下関市に寄贈された。現在は下関市立近代先人顕彰館が中本たか子文学資料館から引き継いだ六一種八九点の資料を保存している。一部(中本たか子手製のクッションなど)は旧中本たか子文学資料館に残った。なお、中本たか子文学資料館を運営していた角島旅館も二〇一〇年一月に閉館した。
- 3 二〇一〇年一〇月一〇日に矢本が川辺勝代氏に面会して確認した。
- 4 富田義弘「書道有情」は、道岡香雲作品展実行委員会編『道岡香雲作品集』(瞬報社、一九九三年一月)に抄録されている。なお、富田氏は少年時代の香雲と中本たか子の接点(中本たか子が香雲の手を引いて角島を散歩した等)について「香雲は信じて疑わない」という書き方で記しているが、中本たか子は一九一六年に家族共々山口町(現山口市)に転居し、一九二七年に上京している。香雲が角島で生まれたのが一九二四年であり、中本たか子が角島に戻ることはほとんどなかった。今回紹介する書簡①で中本たか子は「道岡香雲氏は、どうしても思い出せません。」と述べているが、道岡香雲の回想は思い込みの可能性がある。
- 5 初めは練馬区下石神井一丁目に住み、後に四丁目に移った。なお、一九四五年には秩父に疎開し、戦後は砂川闘争に参加して一時的に(一九五二年頃)立川にいたようである。
- 6 二〇一〇年一〇月一〇日に矢本が川辺勝代氏に面会して確認。
- 7 一九九〇年九月には、下関市立豊北町歴史資料館にも著書『わが生は苦悩に灼かれて』、『広島へ…そしてヒロシマへ』、『とべ・千羽鶴』を寄贈している。
- 8 現在、下関市立図書館は『広島へ…そしてヒロシマへ』を所蔵しているが、梅光学院大学は所蔵していない。
- 9 この他には、晩年の中本たか子による親族(中本幹人・中本ヒサエ)宛ての数点の年賀はがきと手紙がある(下関市立近代先人顕彰館が額装して所蔵、常設展示はされていない)。
- 10 一九八〇年一〇月、ドメス出版
- 11 なお、高砂公民館「美濃部親子文庫」が所蔵する二〇〇三年発行の宮先一勝・田中由美子編『美濃部達吉博士関係書簡等目録』及び二〇一五年発行の『美濃部達吉博士関係書簡等目録 増補版』増補版に目を通したが、中本たか子の名は見当たらない。
- 12 『豊北高校の皆さんへ』は、一九九一年一月号の『広報ほうほく』の特集「孤高の女流作家 中本たか子さんをしのぶ」に、「豊北高校生のみさんん!」と題して、一部省略して部分転載された。
- 13 中本たか子「職場」(一九四一年三月、教材社)所収。「乳母車」には具体的な日付の記載はないが、中本たか子の足跡や弟の受験浪人期間、和田健の回想などに照らして、一九三九年三月下旬頃のことではないかと思われる。
- 14 和田健「苦闘の青春時代」(『広報ほうほく』特集「孤高の女流作家 中本たか子さんをしのぶ」一九九一年一月)
- 15 和田健「中本たか子と田島準子」『防長文学散歩』(一九七五年、白藤書店)
- 16 山口県立大学附属郷土文学資料センター発行『郷土文学資料センターだより』第七号
- 17 『山口県立大学紀要』二〇〇七年
- 18 因みに、菊池寛の長篇小説「勝敗」(一九三二年七月二五日から

一二月三十一日まで『朝日新聞』に連載、全一五九回）のヒロイン佐伯町子のモデルが中本たか子で、その妹の佐伯美年子のモデルが鳥潟美喜子氏だと思われる。さらに、「勝敗」に登場する劇団の大家横山史郎のモデルが横光利一で、新興社の長篇作家山岡敏のモデルが菊池寛、作中で佐伯町子が好意を抱くマルクス主義者の青年井上健二が、昭和五年頃に中本たか子が交際していた共産党の岩尾家定だと推測できる。菊池寛の「勝敗」は戦前に人気を博して映画化・舞台化もされたが、戦後はあまりかえりみられることはない。しかし、フィクションではあるものの、上京した頃の中本たか子の消息をうかがうヒントになり得て興味深い。

矢本 浩司（やもとこうじ）会員・帝塚山大学非常勤講師